

実演を取り入れた授業実践の提案 vol.1 —中学校音楽科鑑賞授業において—

Suggestion of class practice, at the demonstration. vol.1

—In junior high school music department class “Music appreciation” —

仲田久美子*・近野賢一*・松井裕樹*・鳥井雄介**

KUMIKO NAKADA・KENICHI KONNO・HIROKI MATSUI・YUSUKE TORII

*岐阜大学教育学部音楽教育講座 **岐阜大学附属中学校教諭

キーワード：実演、中学校、鑑賞、音楽、授業、アンケート

1.はじめに

1.1 音楽鑑賞会実施の概要

本論は、2019年2月7日に岐阜大学附属中学校4階音楽室で行われた音楽鑑賞会の実施を振り返ったものである。実演を取り入れた鑑賞が音楽の授業として成立するために、本鑑賞会の有効性を検証し、今後どのような観点や工夫が必要かを考察する。

この音楽鑑賞会は岐阜大学教育学部音楽教育講座の仲田、近野、松井が演奏し、岐阜大学附属中学校音楽科教諭の鳥井がコーディネートした。同音楽鑑賞会は「ドビュッシー没後100年*～ドビュッシーとその周辺～」というタイトルで、プログラムの内容はドビュッシーの作品を中心としたものであった。※2018年がドビュッシー没後100年の年であったことにちなんでいる。プログラムの詳細は付録1をご参照いただきたい。

実施にあたっては、まず実施日程を決めることから開始した。本鑑賞会が個別のものとして、普段の音楽の授業からかけ離れないよう鳥井が配慮し、通常授業の時間内に日程を組んだ。次に、子どもたちに何を聴き取らせたいのか、何を感じ取らせたいのか等の知覚させたい点を事前に明確にしておき、生徒達に伝えられるように準備した。これは「主体的な学び」における最初の関門である「学ぶことに興味や関心をもつ」というきっかけを作りたかったからである。また、生徒自身が自分の耳で注意深く聴きつつ興味・関心を持ってもらえるような手助けをするための手段を考えた。実際の鑑賞会の中で、聴取の前に生徒達にリズム打ちをしてもらい、聴取する楽曲の主題のリズムを暗記させた。そして、生徒達が自主的に授業に参加しやすいように、発問や授業構成を事前に計画した。配布物の準備では、生徒達が知覚した情報を書き留めておけるアンケート用紙を用意し、感受の手助けをした。(付録2参照)そして本論のポイントでもある音源については、CD音源の再生ではなく、演奏者による実演での鑑賞を実施した。

1.2 中学校の鑑賞の在り方、問題点について等

現在、小学校及び中学校の音楽では、学習すべき内容として「A表現」「B鑑賞」の2つの領域が学習指導要領によって示されている。また、この2つの領域は、どちらも「幅広い活動を通して」行われるよう示されており、バランスよく学習されることが望ましいといえる。

しかし、多くの学校で「A表現」の学習に多くの時間が使われるのに対し、「B鑑賞」の学習時間は非常に限られているという傾向があるようである。この問題について松井は、別の稿(松井・松永 2013)においても指摘しているが、原因として、音楽科の授業時間数が少ないという問題や、学校や学級づくりの一手段として合唱が用いられていることなどが挙げられている。また、鑑賞領域の学習には、楽曲を聴いて感想を記述したり話し合ったりするだけの授業スタイルや、評価の難しさといった様々な課題もあり、「音楽担当教師の悩み」(金本ほか 2006, p.141)となっているようである。

さらに、中央教育審議会答申において、表現及び鑑賞の授業における言語活動が重要であるとされたことを受け、平成29年度に示された新しい指導要領では、言語活動の充実化を図るよう示されている。高橋は、平成24年に改訂された学習指導要領及び、平成29年に示された学習指導要領から「音楽を聴いて言語化する」という活動の重要度がさらに高くなっている(高橋 2018, p.48)と分析している。このことから、近年では鑑賞学習における言語活動に関する研究が盛んにおこなわれている。

こうした中、新たな問題として、言語活動や、言語化のために音楽の諸要素に着目させる学習の危険性を指摘する研究もある。徳田は、鑑賞学習における言語活動について、「「味わって聴く」ことを安易に言語活動と結び付け、子どもの思いと音楽とが必ずしも深くかかわらないままに記述された文章を根拠に「鑑賞の能力」を評価してしまうような実践も決して少なくない」(徳田 2012, p.44)と指摘する。また、古山は「要素を聴きとらせることに終始したり、自分が感受したことを予め設定された要素に結び付けさせたりする活動に留まっていたり、音楽を聴く喜びに繋がらず、音楽を聴く力が育ったとはいえない」(古山

2019, p.64)と指摘する。さらに、「音楽を鑑賞し、享受した内容を言葉で正確に言い表すことはできない」とした上で、「予め設定した観点から音楽を聴くことは、音楽そのものを味わうことに必ずしも結びつかない」(古山 2019, p.64)とし、鑑賞領域の学習におけるこうした授業スタイルは、本当の意味での鑑賞ではなく、聴取であると指摘する。そして、教師に求められるのは「「聴取」から「鑑賞」へ導くこと」(古山 2019, p.64)とし、本当の意味で聴く力を育む授業を行うためには「教師自身が音楽を鑑賞する力を身に付けなければならない」(古山 2019, p.64)としている。

この他にも、西島は「音楽を聴いてそれを言語化するというを常にしなければいけないとなると、それは果たして良いことなのか、もしかしたら阻害することなのか、明確には言えません。でも……音楽を聴いてゾワッとしたというようなものを失ってしまう危険性は科学的に見てもありうる」(今川ほか 2012, p.12)と指摘している。また、今川は「言語活動を取り入れることによって、実は音楽活動が活性化しないかもしれない」(今川ほか 2012, p.12)と、言語活動を取り入れた鑑賞指導の在り方の危険性を指摘する。これらを踏まえ、佐藤は「言葉で表す」や「根拠をもって批評する」が突出し、しかもそこだけが評価の対象みたいになってしまうのは危険」(今川ほか 2012, p.12)であると述べている。さらに、こうした言語活動の充実のためにしばしば使われるワークシートについても、山内は「書かせているから全部把握してます、という教師側の、いわばアライバイみたいなもの」(今川ほか 2012, p.14)と指摘する。また、佐藤は「音楽の本質が壊れるようなワークシートや感想文の扱いはよくない」(今川ほか 2012, p.14)として、ワークシートの在り方にも留意する必要があることを述べている。

以上のように、学習内容の改善及び充実の具体策として示された言語活動ではあるが、鑑賞活動におけるこの活動には様々な留意点や課題点があるといえる。このような問題は、そもそも鑑賞という行為は人それぞれによって味わい方が違うものであり、主観的なものであるがゆえに起こる問題で、教育活動として鑑賞を取り入れる時、常に教師が向き合わなければいけない課題であるといえる。しかし、集団で音楽を聴き学習することの良さとして、芳賀らは「集団で音楽を聴取する意義は、他者とその楽曲について話し合ったり他者の意見を聞いたりすることを通して、自分が知覚・感受できなかったことに対する気付きが促され、楽曲に対する印象が捕捉されることで、新たな視座からの楽曲への向き合い方が方向づけられることである」(芳賀ほか 2016, p.196)とする。平成 29 年に新指導要領が示され一つの転換期となっている現在、これまでの課題を見直し、よりよい鑑賞学習の在り方について今後もさらに研究が続けられる必要がある。徳田は、「長い間難しいとされてきた鑑賞の評価のどこに問題があったのか、新しい鑑賞の評価のよさや課題はどこにあるかなどについてしっかりと吟味することが大切」(徳田 2012, p.44)としている。

1.3 附属中学校の鑑賞及び鑑賞能力の実態

岐阜大学附属中学校では、「音楽的な見方・考え方を働かせて表現や感じ方の変容を実感できる生徒の育成」を音楽科の目標としている。この目標を実現するため、毎時の学習においては、生徒たちが音楽を形づくっている要素に常に着目できるよう工夫を行っている。また、着目させたそれらの要素を考えの拠り所として、「A 表現」「B 鑑賞」のそれぞれの領域の学習において生徒の深い学びが実現できるよう授業研究に努めている。さらに変容を実感するために、仲間との交流の時間を通して、自分の考えを再構築することを大切にしている。

表現領域の学習の一つである合唱は、クラスづくりや学級づくりとしても取り入れられているため、担任や生徒たちの関心も高く、授業においても意欲・関心の高い生徒が多い。また、本校合唱部が平成 25 年度及び平成 28 年度に全国大会出場を果たしたことも、生徒たちの意欲・関心を高めることにつながっていると考えられる。授業では、響きのある声の出し方やより良い表現について、仲間同士で活発に意見を交換し合い、積極的に学習に取り組む姿が多く見受けられる。

対照的に、鑑賞領域の学習においては、生徒たちが意欲的・積極的に学習する姿は、表現領域の学習時と比較すると、多いとはいえない。これは、先行研究によって指摘されてもいるが、授業時間数が少ないということが原因の一つとして考えられる。また、限られた授業時間の中で行う鑑賞の授業の評価も非常に難しいと言わざるを得ない。これらのことから、生徒たちが意欲的に学習に取り組むことができ、鑑賞の能力を高めることができる鑑賞の授業の在り方の研究が今後の課題であると考えている。

2. 先行研究について (太字部分は本文のまま。引用部分は [] で括った)

本論では、実演を用いた場合の鑑賞授業について考察するため、先行研究においては「実演」「中学校の音楽の授業」「鑑賞」というキーワードから抽出し参考・参照した。このように限定したのは「鑑賞」というキーワードだけではアウトリーチ活動も含まれると考えたからである。本論では原則として学校での鑑

賞の授業について論じる。

音楽鑑賞についての先行研究は非常に多岐にわたっており、「教育音楽 小学版 2019年1月号」の特集記事で「鑑賞の授業 達人の極意」では栗飯原喜男と高倉弘光による「どの子にもできる鑑賞の授業」についての対談がある。この特集記事では、鑑賞に関する重要なポイントが多く語られており大変興味深い。この中で栗飯原は「ねらいの焦点化、それと**知覚からスタートすること**。—中略— 音楽が苦手な子も「こういう聴き方だったらぼくにもできそうだな」と思える、その方法論が大事だと思います。」と述べている。つまり「知覚」からスタートし、その後「感受」（ここではイメージの感受とっている）に行きつく（導く）授業が鑑賞の授業の方法だと述べている。また、「そしてその先に「味わう」というものがある。だからこそ**知覚から感受を大切にしたい**」（栗飯原・高倉 2019、p.22）とも述べている。

この対談はこの後、鑑賞授業の核心に迫る。栗飯原は「**だけど実は授業をする側は、感受から入ったほうが楽なんですよね**」と言い、それに対して高倉が[「**そういうのは良い授業とは言わない**」という価値観を持つべきですよね]（栗飯原・高倉 2019、p.22）と受け答えている。演奏者側からの見方を優先してしまうと、「別段、感受が先でも問題はないのではないか」と思うが、授業者の立場からすると「感受」の前に「知覚」がないと手順を踏んだことにはならないということになる。

更に栗飯原は[「**知覚から感受へ**」というの、言い方を変えれば、**音楽を聴く耳を鍛える**ということだと思ふ]と明言し、続けて[今の子どもたちは、音楽をBGMみたいに「聴き流す」ことには慣れてるけど、心の中にはほとんど入っていないんだよね。だから面倒かもしれないけど、ステップを踏んで進んでいくことはとても大事]（栗飯原・高倉 2019、pp.22-23）と述べている。このような栗飯原の指摘からも、心の中に入るような音楽鑑賞の時間を成立させるためには教師による綿密な計画や授業展開の可能性を広げていく想像力が必要になるといえる。

そして教材選びについて、高倉は「教材選びには2通りあります。一つ目は、**自分が子どもたちに教えたいこと**。（中略）そして二つ目は、**曲が先に決まっているケース**」（栗飯原・高倉 2019、p.23）と述べている。そして、栗飯原は音源選びについて「本当にいい音源を選べるか、いい音源かどうかを判断できる耳を教師自身が鍛えなくてはならないと述べ「教師の美意識」が授業を大きく左右するのではないかと指摘している（栗飯原・高倉 2019、p.23）。更に鑑賞時の環境について高倉は「ホールに行ったらこれくらいの音で聴こえる」という音量を目安にしているとも発言している（栗飯原・高倉 2019、p.24）。このことから、鑑賞の授業では音源がCDやDVDであろうと（あるからこそ）「鑑賞環境を整える」という点にも気を配らなくてはならないことが分かる。最終的に目指したいのは「対話的な授業」であり、「次はどうしたら子供が音楽と仲良くなれるかな」と何度も考えることだと高倉は述べている（栗飯原・高倉 2019、p.25）。

鑑賞の授業において「味わう」という点について、栗飯原は「子どもたちがどう音楽を味わっているか、あらゆる方法で可視化すること」と述べている（栗飯原・高倉 2019、p.26）。高倉は子どもたちが味わった音楽を身体表現で表出させる授業を実践しているし（栗飯原・高倉 2019、p.25）、ワークシートや言語活動に加え、栗飯原は「**ここ好きバロメーター**」というものをを用いて音楽を味わう手助けになるような旋律を口ずさむ活動を必ず入れるとのことである。栗飯原は、[聴いた音楽の旋律が口ずさめるようになることは、曲名や作曲者を知ることよりも重要だと、私は思うから。]（栗飯原・高倉 2019、p.26）と述べている。以上のように、「鑑賞」の授業において、教師側がこだわるべき、また考えるべき点は大変多いといえる。

その他、「実演」による「鑑賞授業」を試みた先行研究には、吉永誠吾、森恭子、横山洋子らによる「音楽鑑賞教室の試み」熊本大学教育実践研究 14：63-66（1997年）<http://hdl.handle.net/2298/20865>がある。彼らは熊本大学の教員が昭和53年を皮切りに長期に渡って続けてきた「鑑賞教材を中心としたプログラムによる生演奏での音楽鑑賞教室活動」について記録しまとめている。この活動は萌芽的であり、現在では広く行われるようになっているアウトリーチ活動の先駆けだったのではないかと推測する。小学校での音楽鑑賞会開催には保護者も参加し、小学校の校歌をプロの演奏をバックに歌う時間も設けられている。吉永は「演奏者と聴衆（子供達）の間に感動のコミュニケーション（ま）を共有したことの証しといえるであろう」と述べている。とはいえこの活動は「文化振興活動」に寄ったものであると見受けられる。つまり、「鑑賞授業」として「鑑賞のねらい」を定めていたわけではないし、曲を聴くときのポイントを示すことはしていないようである。福井は月刊「音楽鑑賞教育」（2002年10月号 p.49）の「中学校の鑑賞教育を考える」の中の「音楽的な感受の能力を育てる鑑賞指導」の中で「授業は生徒の学力の伸長に目的がありますから、意図的な活動が展開されなくてはなりません」と述べている。筆者らも熊本大学の活動のように「純粋に芸術に間近に触れることができる体験」は非常に大切に貴重な体験であると考えているし、先に述べたように「授業」ではなく「単なる音楽鑑賞会」であれば「感受」が先にあっても問題ないと考えている。

その他、信州大学の齊藤忠彦と松本市立筑摩野中学校の杉山厚志による「中学校音楽科における鑑賞教

材選択の視点と教材例 信州大学教育学部紀要 No.114 (2005年 pp.37-46)の中には、「音楽鑑賞」という行為がエジソンによる蓄音機以前は人による演奏だけが音楽を鑑賞できる手段だったことを前置きし、[人が演奏している姿を観て初めて伝わってくる視覚的な魅力や感動もある](齊藤・杉山 2005、p.42)と述べている。ただしこの論文では映像を伴う鑑賞教材を積極的に取り入れるべきだと結論づけている。

以上のことから「然るべき段取りを事前に立てれば、通常の CD 音源を聴く場合の鑑賞の授業でも十分に鑑賞の授業が成立する」という仮説が立つ。もしそうだとすれば、より一層「感受から味わいへ」の振れ幅を大きくするために「実演」という方法が有効ではないかという予測がたてられる。

3.鑑賞会について

3.1 趣旨

本鑑賞会は、岐阜大学附属中学校 1 年生を対象に行った。楽曲については、仲田、近野、松井らで 2018 年 12 月 12 日に行った演奏会「ドビュッシー没後 100 年～ドビュッシーとその周辺～」のプログラムから数曲を取り上げた。この演奏会は、C.ドビュッシー没後 100 年を記念して行った演奏会であるが、ここで取り上げた楽曲を中学校でも演奏することで、普段クラシックの演奏会にあまり行ったことのない生徒たちにも、クラシック音楽に親しんでもらうきっかけになればと考え、教科書にはない楽曲ではあったが、本鑑賞会のプログラムとした。

また、鑑賞にあたっては、簡単な解説を行ってから楽曲を演奏した。解説の中では、その楽曲の特徴といえる形式やリズムなど、着目するとよい音楽的要素について説明を行い、生徒たちが視点をもって鑑賞できるようにした。また、それらの解説は「鑑賞のポイント」としてアンケートに記載し、生徒たちが意図的に鑑賞に臨めるよう工夫した。次に、アンケートに設定したそれぞれの項目について詳細を述べる

3.2 アンケートの詳細とそれぞれの項目について

アンケートでは、音楽を構成する諸要素に関する設問と、音楽を感受しイメージしたことにに関する設問の 2 つを設定した。また、それぞれの曲において、自由に記述することができる箇所も設けた。具体的な楽曲と各曲に対する設問は以下の通りである。また、設問の意図や鑑賞の際説明した点なども併記する。

<音楽の構成する諸要素に関する設問>

●C.ドビュッシー作曲「小組曲」より、「小舟にて」

設問 1：全音音階の部分に気が付いたか

設問 2：ABA'の形式の曲で、A の冒頭と同じ旋律 A'で再現されたことに気づいたか

この設問では、本楽曲の形式である 3 部形式と、ドビュッシーの作品で印象的に使われることの多い全音音階について、生徒らによく聴いてほしいと考え設問とした。全音音階については、楽曲中に使用された全音音階の部分を取り出して、演奏前にその部分だけを聴かせ、その後演奏を行い、生徒らがわかり易いよう工夫した。

●G.フォーレ作曲 組曲「ドリー」より「こもり歌」

設問 1：モチーフのリズム反復について、リズムを感じることができたか

設問 2：演奏者 2 人が弾く「違う高さの旋律」を聴くことができたか

この設問では、モチーフが高さを変えて演奏される点に着目して聴けるよう考えた。また、モチーフのリズムを手で叩かせた後演奏し、生徒らがわかり易いよう工夫した。

<音楽を感受してイメージしたことにに関する設問>

●C.ドビュッシー作曲 歌曲「美しい夕暮れ」

設問 1：川面を染める夕暮れや、その色が刻々と変化の様子を、音楽からイメージすることができたか

この曲では、歌詞の説明と共に、夕暮れの景色や色合いの変化などが伴奏に表現されていることを説明し、生徒らが意欲的に鑑賞に臨めるよう工夫した。

●E.デュパルク作曲 歌曲「旅への誘い」

設問 1：歌われている歌詞の内容を知らずに聴いた 1 回目には、音楽からどのようなイメージができたか

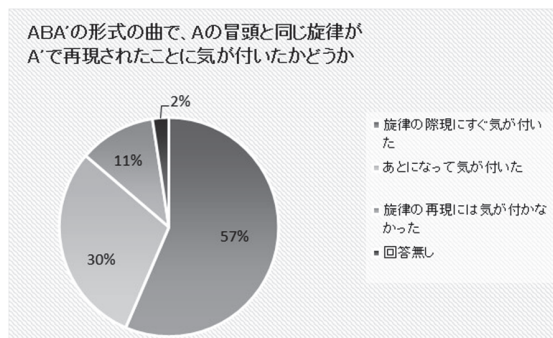
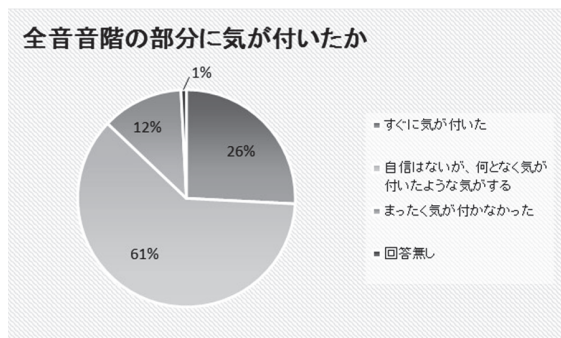
設問 2：歌詞の内容や説明を聞き、1 回目とは違うイメージを持ちながら聴くことができたか

この曲では、フランス語の歌詞を説明しないまま 1 回目を演奏し、その後歌詞の和訳を配布し再度演奏した。1 回目の演奏では歌詞がわかる生徒はいないので、曲の雰囲気からどのようなイメージが起こるかを自由に回答させた。また、2 回目の演奏では、歌詞の意味からもどのようなイメージが生まれるかを自由に回答させた。

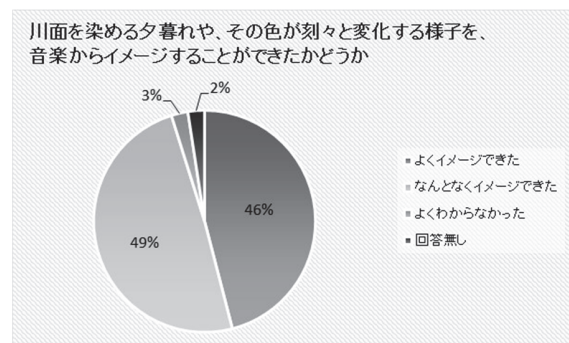
4. アンケート集計結果

上述のアンケートに関する結果を以下に示す。

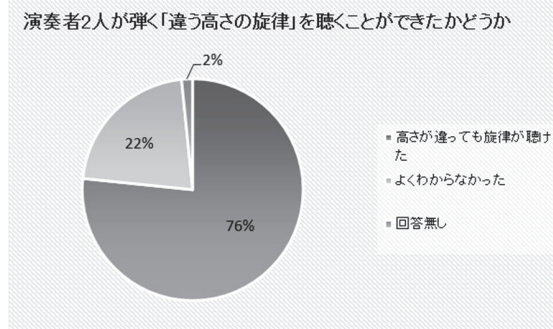
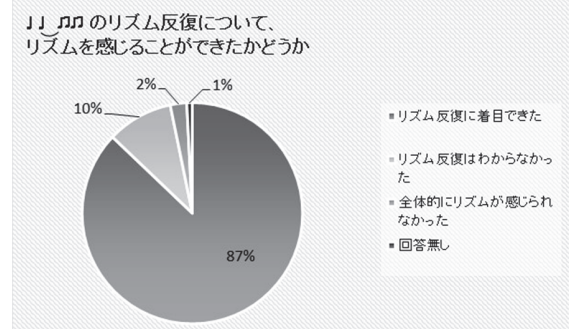
●C.ドビュッシー作曲「小組曲」より、「小舟にて」



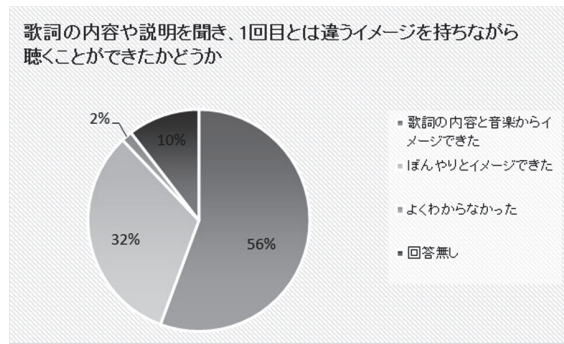
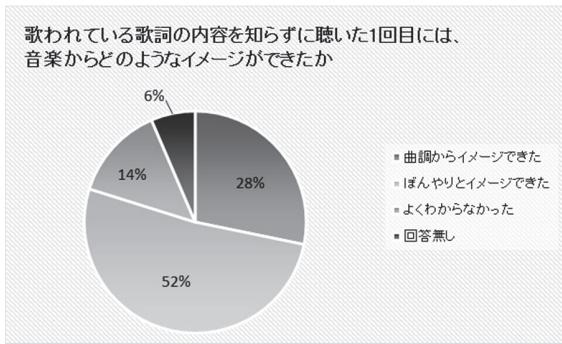
●C.ドビュッシー作曲 歌曲「美しい夕暮れ」



●G.フォーレ作曲 組曲「ドリー」より「こもり歌」



●E.デュパルク作曲 歌曲「旅への誘い」



5. アンケートの記述からの考察

生徒らの回答から、演奏前に解説したことについては、多くの生徒が理解することができていることがわかる。また、自由回答欄では次のような記述も見られた。

<C.ドビュッシー作曲「小組曲」より、「小舟にて」>

- 生徒 1：全音音階のひびきが美しく感じられた
- 生徒 2：途中で気づいて、とても美しいと感じました
- 生徒 3：なめらかな感じ 虹のようにずっと続いていた感じだった
- 生徒 4：その音が耳に入るとふぁーっとしたきもちになり、夕方のゆらゆらした感じになりました
- 生徒 5：川や美しい野原を思い浮かぶような感じ
- 生徒 6：最初は滑らかな感じで途中からリズムカルなはずむ感じに変わってまた戻っていった
- 生徒 7：A と B の曲想がガラッと変わり、とてもきれいだった
- 生徒 8：A の部分はやさしい感じで、B の部分は激しかった
- 生徒 9：小舟がゆったり泳いでいて風が来たようで、またもとに戻ったのを感じた
- 生徒 10：ゆったりした後すぐに（激しい）激しい感じが出て小舟の強さも感じた

これらの記述からは、生徒らが知覚した音楽的な諸要素が、情景のイメージや音楽の美しさを感じる要素となっていることがわかる。例えば生徒 1・生徒 2 は、知覚した全音音階が「美しい」と感じている。また、生徒 3 は曲中に表れる全音音階を聴いて「虹のようにずっと続いていた感じ」といった情景をイメージしている。同様に、生徒 4 は「夕方のゆらゆらした感じ」、生徒 5 は「川や美しい野原」をイメージしている。また、形式の違いから情景を連想した生徒もいる。例えば生徒 9 は、「小舟にて」の中間部の様子を「風が来た」と表現している。さらに生徒 10 は「小舟の強さ」を感じたと述べている。

これらの記述から、演奏前に音楽的な諸要素に着目させたことで、生徒らが視点をもって楽曲を聴くことができ、その結果、生徒らが知覚した音楽的な諸要素から、音楽の美しさを感じることができたり、自由に情景やストーリーなどをイメージしたりできていると考えられる。

また、次のような記述もあった。

<C.ドビュッシー作曲 歌曲「美しい夕暮れ」>

- 生徒 11：リズムがゆっくりなところがあつたから、川が流れている気がしました
- 生徒 12：曲調がゆるやかに変わっていて変化する様子が分かった
- 生徒 13：暗い感じの音色で、だんだん暗くなっていくイメージだった
- 生徒 14：ピアノから、だんだんと暗くなっている感じがした。歌から強弱が付いていて夕暮れの変化が大きいなと思った
- 生徒 15：ピアノとともに歌が低くて一生は短いことがよく分かりました
- 生徒 16：ピアノの音が、夕暮れの感じだった
- 生徒 17：ゆったりとした曲調が夕暮れ時ということを感じました
- 生徒 18：声の響きにより夕暮れを感じる事ができました。そのイメージが新鮮です

これらの記述からは、自分のイメージした情景や感情が、楽曲の音楽的要素のどういったところにつながるのかを分析しながら聴いている生徒がいることがわかる。例えば生徒 11 は、川が流れる様子をイメー

ジした理由を「リズムがゆっくりなところがあつたから」と分析している。また、生徒 12 は、夕暮れの変化する様子を「曲調がゆるやかに変わって」いる部分から感じたと分析している。さらに生徒 13・生徒 16・生徒 18 はピアノの音色や声の響きにも着目して聴くことができている、生演奏ならではの効果といえる。これらの回答からも、アンケートの設問や演奏者による演奏前の解説が、生徒の感受につながる鑑賞に繋がっていることがわかる。さらに、これらの記述からは、イメージや情景を説明してから演奏することで、生徒らは音楽的な要素を分析していることがわかり、大変興味深い。

また、全体を通しては、次のような記述が見られた。

生徒 19：細かなしぐさや表情も見れて面白かった

生徒 20：歌では、迫力があってピアノでは指さばきを間近に感じることでいい経験になった

生徒 21：間近だからこそ、歌っている人のすごさや、ピアノの音の美しさを感じることでできた

生徒 22：よくわからないフランス語でも、少しずつイメージができました。音も声も良く響いてよく聞こえた

生徒 23：テレビなどできく声とは全然違う高低差の分かりやすい声だと思った

生徒 24：やはり、ホールでは間近で聴いたことがなかったの、こんな体験ができてすごく良かったし、ピアノの美しさ、歌など音と近くにいてすごく感動しました

生徒 25：舞台などで生で歌をきくよりもはるかに迫力があってとても歌を感じやすかった

生徒 26：迫力満載でした 自分は音楽の鑑賞をあまりしないので、すごくいい経験となりました

生徒 27：間近で演奏を聞くとより心に残るし歌や曲がイメージできる

生徒 28：ビデオやイヤホンごしに聴くものと同じなのに、同じではない感覚を楽しめました

生徒 29：圧倒された 感動して声も出なかった

生徒 30：いつも音楽の鑑賞をすると、聴くだけでとくに何も感じないけれど、実際に聴いたら心に響いてとても心地よかったです

生徒 31：音だけでは気づくことができなかつたけど、指を見て気づくことができた

鑑賞会全体を通しての記述からは、生演奏での鑑賞であったからこそ感想が多く見受けられた。例えば、生徒 20、は「間近に感じることでできた」、生徒 21 は「間近だからこそ、歌っている人のすごさや、ピアノの音の美しさを感じることでできた」、生徒 24 は「ピアノの美しさ、歌など音と近くにいてすごく感動しました」と記述している。間近で生の演奏を鑑賞できたことが、生徒らの感動につながったといえる。また、生徒 26 は「自分は音楽の鑑賞をあまりしない」と記述しており、こうした生徒には実際の演奏に触れる良い機会となっているといえる。また、生徒 29 は「感動して声も出なかった」と記述しており、鑑賞の授業が音楽を聴いたことの感動や喜びとつながっているといえ、こういった感想は、CD や映像資料の鑑賞では得ることのできない感想であろう。さらに、生徒 30 の「いつも音楽の鑑賞をすると、聴くだけでとくに何も感じないけれど、実際に聴いたら心に響いてとても心地よかったです」という感想も、実演奏が鑑賞の授業として有効であることを如実に示しているといえる。

また、生徒 19 は「細かなしぐさや表情も見れて面白かった」と記述している。これは、生徒が自発的に見たい視点を持って鑑賞していたことがわかる記述である。鑑賞教材として用意されている映像・音源は、カメラワークや編集により、鑑賞者は同一の視点で鑑賞することになってしまいがちだが、本鑑賞会では生の演奏で鑑賞を行ったことで、生徒らは自由な視点から聴くことができた。具体的には、ピアノの指の動きを見ながら聴いている生徒や、歌い手の表情や仕草に注目して聴いている生徒など、様々な生徒がいた。さらに、生徒 31 の「音だけでは気づくことができなかつたけど、指を見て気づくことができた」という記述は、生演奏による鑑賞の有効性を十分に裏付けることができる記述であるといえよう。これらの記述から、生演奏での鑑賞会では、生徒らが自発的に視点をもって聴くことができ、視覚的に音楽の美しさや構造的な要素を理解することの一助となるといえる。

この他に、生徒 22 は「よくわからないフランス語でも、少しずつイメージができました」と記述している。本鑑賞会での選曲は、ほとんどの生徒が知らない曲ばかりであったにも関わらず、鑑賞会全体を通してネガティブな感想はほとんど見られず、間近で見られたことに感動したといった感想や、鑑賞が楽しかったといった意見が多かった。これらのことから、生演奏による鑑賞授業であれば、鑑賞教材の選択の可能性が広げられるといえるだろう。

これらのアンケートに記述された生徒らの感想からは、生徒が自ら感性を働かせたり視点を持ったりして音楽と向き合い、音楽を形づくる要素や、音楽の表す情景を捉えていることがわかる。指導要領では、生徒自らが音楽を形づくる要素や働きと、自己のイメージや感情などを関連付けて考えているとき「音楽的な見方・考え方が働いている（文部科学省 2018, p.11）」と述べられている。このことから、実際の演奏を鑑賞の授業に用いることは、生徒の音楽的な見方・考え方を育てることにつながり、質の高い学びを

実現することになり、実演奏が鑑賞の授業に有効であるということができる。

他方、「わかった」「すぐ感じれた」といった単純な回答も数多く見受けられた。これは、自由に回答を記述する欄が設問と同じスペースに作られていたからであったことと、感想を交流する時間を設定しなかったことによるものであると考えられる。指導要領では「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫することが大切である」(文部科学省 2018, p.15)と示されており、今後の実演を用いた鑑賞授業での課題であるとする。また、生徒が自由に記述できる回答欄の作成やワークシートの在り方についても研究を進めていきたい。

6. 今後の鑑賞の在り方について—実演を取り入れた授業実践の提案—

6.1 学校との連携・協働について

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) 補足資料」の「第1部 学習指導要領等改訂の基本的な方向性」のうち、「1. 学習指導要領等改訂の基本的な方向性」の中にある「これからの教育課程の理念」<社会に開かれた教育課程>では、「③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。」という文言がある。これを音楽の授業に当てはめて考えると、様々なジャンルの演奏家達が学校の音楽鑑賞の授業に演奏者として参加するような「連携と協働のシステム」が考えられるのではないだろうか。単なるアウトリーチ活動ではなく、鑑賞の授業の本時のねらいに沿った指導案の中で体系付けて考えられた身につけたい力を明確にしたうえで演奏者が連携でき、学校の指導体制の充実が図られれば、大変有意義な音楽鑑賞の授業を行うことができるのではないだろうか。

6.2 まとめ 今後の鑑賞の在り方について—実演を取り入れた授業実践の提案—

日本の音楽鑑賞において充実した活動を実践している公益財団法人音楽鑑賞振興財団によるWEBサイト「ONKAN ウェブネット」の中にある「音楽鑑賞指導に役立つコンテンツ」に「音楽鑑賞指導の事例と教材」がある。これは月刊「音楽鑑賞教育」バックナンバーの記事が抜粋されて掲載されたものである。その中の「中学校の鑑賞教育を考える」は、2001年10月から月刊「音楽鑑賞教育」誌上で連載された「中学校の鑑賞教育を考える」シリーズである。福井のその記事は、執筆から既に18年経過してはいるものの、中学校の音楽科の教員が鑑賞を考える際に押さえておくべき点について書かれており、授業を考えるための根本的なヒントを提案したものといえよう。その中の第2シリーズ(1)「音楽的な感受の能力を育てる鑑賞指導」(福井)は特に興味深いものである。この中で福井は「同一楽曲の比較聴取」「形式の聴取」「反復・変化・対照の聴取」について言及しており、「音楽を聴いて、それぞれの違いを感じ取る力、すなわち、感受による識別力」(2002年4月号 p.48)について述べ、「楽曲の形式の感受と理解は、曲想や音楽の要素とその変化の感受が基礎になっているのです。」(2002年5月号 p.46)とも述べている。本論は2019年2月7日に実施した音楽鑑賞会をもとに論じたが、今後「比較聴取」に焦点を当てた音楽鑑賞会(2019年3月16日実施)についても報告する予定である。

さいごに、今後の鑑賞の在り方について—実演を取り入れた授業実践の提案—については、こどもが主体的に能動的に学べる空間をつくり、こども自身に「文字・言語」を用いて丁寧に授業を振り返らせ、熟考させ、他者の多様な意見も聞いて対話的交流をしつつ、自分の意見を理論的に述べるような構成にすること、そして、それと同時に教科のねらいに沿っているかについても常に教師が導く授業が実践できることを実現したいと考える。今後も生演奏での鑑賞の授業活動を行うことを継続しながら、指導要領の目指す内容に即して授業設計できるようにするための鑑賞の授業を検討していく。今後は更に授業の実践に踏み込んで協働・連携を深めていくこと、そして、鑑賞の授業での評価について、また他の表現活動等とも関連させて発展させていきたい。

7. 引用文献・参考文献・参照資料

- 粟飯原喜男・高倉弘光(2019)「鑑賞の授業 達人の極意: Chapter 1 対談 粟飯原喜男×高倉弘光」、『教育音楽 小学版』2019年1月号、音楽之友社
- 今川恭子ほか(2012)「音楽科の評価—測ってきた音楽・測ってこなかった音楽」、『音楽教育実践ジャーナル』10巻1号、日本音楽教育学会
- 金本正武ほか(2006)「小・中学校における音楽科の指導と評価のすすめ方について—鑑賞指導をとおして—」、『千葉大学教育学部研究紀要』第54巻
- 古山典子(2019)「音楽科における鑑賞教育に関する基礎的考察—学習指導要領における「鑑賞」—」、『福山市立大学教育学部研究紀要』第7巻

齊藤忠彦・杉山厚志 (2005) 「中学校音楽科における鑑賞教材選択の視点と教材例」、『信州大学教育学部紀要』114 巻

高橋千絵 (2018) 「中学生による音楽鑑賞文の記述内容に関する基礎的研究 (1) —音楽経験の有無が言語化にもたらす影響を中心に—」、『広島文化学園大学学芸学部紀要』第 8 巻

中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) 補足資料」、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) (中教審第 197 号)』、『http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf』

徳田崇 (2012) 「[プロジェクトⅣ：鑑賞 その2] 「味わって聴く」力の評価」、『音楽教育実践ジャーナル』10 巻 1 号、日本音楽教育学会

芳賀均・木村貴紀 (2016) 「知覚を高める音楽鑑賞の授業—音楽家を交えた批評の活動を通して—」、『学校音楽教育研究』20 巻、日本学校音楽教育実践学会

福井昭史 (2002a) 「中学校の鑑賞教育を考える：2-1.音楽的な感受の能力を育てる鑑賞指導～その1 同一楽曲の比較聴取を通して～」、『https://onkan-web.net/document/member/teaching/teaching_06/teaching_06_07.pdf』、(最終閲覧日：2019年8月1日)

福井昭史 (2002b) 「中学校の鑑賞教育を考える：2-1.音楽的な感受の能力を育てる鑑賞指導～その2 形式の聴取を通して～」、『https://onkan-web.net/document/member/teaching/teaching_06/teaching_06_08.pdf』、(最終閲覧日：2019年8月1日)

福井昭史 (2002c) 「中学校の鑑賞教育を考える：2-1.音楽的な感受の能力を育てる鑑賞指導～その7 授業成立の条件である音楽的な感受の表出～」、『https://onkan-web.net/document/member/teaching/teaching_06/teaching_06_13.pdf』、(最終閲覧日：2019年8月1日)

松井裕樹・松永洋介 (2013) 「中学校鑑賞指導において現代音楽を教材として扱うことの有効性」、『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』第 15 巻

文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編』

吉永誠吾・森恭子・横山洋子 (1997) 「音楽鑑賞教室の試み」、『熊本大学教育実践研究』第 14 号

8.付録

8.1 付録1：配布プログラム



プログラム

はじめに

ドビュッシー作曲 「小組曲」より《小舟にて》(ピアノ連弾)

- 1) ドビュッシーについて
- 2) 曲目紹介《小舟にて》について
- 3) 演奏

ドビュッシー作曲 《美しい夕暮れ》(バリトン独唱)

- 1) ドビュッシーの歌曲について
- 2) 演奏

フォーレ作曲 「組曲ドリー」作品56より《子守歌》(ピアノ連弾)

- 1) フォーレについて
- 2) 曲目紹介《子守歌》について
- 3) 演奏

デュバルク作曲 《旅への誘い》(バリトン独唱)

- 1) デュバルクの歌曲について
- 2) 演奏

質問・交流



曲目解説

ドビュッシー作曲 「小組曲」より《小舟にて》

ドビュッシーは1862年にパリ近郊のサン・ジェルマン・アン・レーという町で生まれ、1918年に亡くなったフランス近代の作曲家。昨年2018年が没後100年にあたる。この曲は初期の1889年に作曲された全4曲で構成されているピアノ連弾用組曲で、第1曲「小舟にて」は湖の上に浮かぶ小さな舟を表現しているのか、静かに揺れているようである。作品はドビュッシーの初期作品の多くにみられるような教会旋法や5音音階、また全音音階などが巧みに使用されており、長調や短調の枠にしばられない作風となっている。

ドビュッシー作曲 《美しい夕暮れ》

ドビュッシーの作曲の最初期に書かれた作品。彼の歌曲の中で最初に出版されたとされる作品で、18歳頃の作(16歳の説もあり)。美しい夕暮れの情景と人生のはかなさが重ねて描かれている。

フォーレ作曲 「組曲ドリー」作品56より《子守歌》

フォーレは古典音楽学校(通称ニデルマイエール校)で音楽を習得し、グレゴリオ聖歌やルネサンス期の合唱音楽を学んでいる。フォーレは「専音のもつ緊張が主音に進む弛緩という安心感のある動きをもつ」と「長調なのか短調なのかどちらとも言えない浮遊感と曖昧さをもつ」とを融合させ、独自の音楽表現を成功させた。「子守歌」は大変さわやかで素朴な曲。

ルネサンス期とは、バロック期の前で、バッハよりも古い時代である。

デュバルク作曲 《旅への誘い》

デュバルクは500に近い歌曲を作曲しながら、生来の内向的な性格と厳しい自己批評から17曲を残して自ら破棄してしまった。37歳であった1885年頃から神経衰弱におちいり、その後48年間は何も作曲せず、85歳で静かにその生涯を閉じた。「旅への誘い」はデュバルクの歌曲の中で最も知られている傑作。22歳頃の作曲で、夫人に捧げられている。

8.2 付録2：配布アンケート用紙

岐阜大学附属中学校（1年生対象）音楽鑑賞会 2019年2月7日（木）※音楽鑑賞会の後で記入して下さい。2月7日（水）6時間目終了後に回収します。
 性別（男・女） 音楽学習歴 当てはまる□に✓を入れてください。（□音楽（楽団全般含む）を習ったことがある※、□音楽系の部活や地域団体に所属している）
 ※各種鍵盤楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、声楽、聴音、ソルフェージュ、学外での合唱団所属、各種和楽器も含まれます。

作曲家名	楽曲名	鑑賞のポイント	鑑賞の振り返り：最初に、当てはまるものに✓を入れてください。複数✓をつけても構いません。✓を入れた後、「自由回答欄」へは気が付いたことや感じたこと等、自由な感想を何でもよいので書いてください。
ドビュッシー	小舟にて	全音階の部分に気が付いたかどうか	<input type="checkbox"/> すぐに気が付いた <input type="checkbox"/> 自信はないが、何となく気が付いたような気がする <input type="checkbox"/> まったく気が付かなかった 自由回答欄
		ABA'の形式の曲で、Aの冒頭と同じ旋律がA'で再現されたことに気が付いたかどうか	<input type="checkbox"/> 旋律の再現にすぐ気が付いた <input type="checkbox"/> あとになって気が付いた <input type="checkbox"/> 旋律の再現には気が付かなかった 自由回答欄
ドビュッシー		川面を染める夕暮れや、その色が刻々と変化する様子を、音楽からイメージすることができたかどうか	<input type="checkbox"/> よくイメージできた <input type="checkbox"/> なんとなくイメージできた <input type="checkbox"/> よくわからなかった 自由回答欄 どのようなイメージが思い浮かびましたか？
フォーレ	こもり歌	J.J.K.K.のリズム反復について、リズムを感じることができたかどうか	<input type="checkbox"/> リズム反復に着目できた <input type="checkbox"/> リズム反復はわからなかった <input type="checkbox"/> 全体的にリズムが感じられなかった 自由回答欄
		演奏者2人が弾く「違う高さの旋律」を聴くことができたかどうか	<input type="checkbox"/> 高さが違っても旋律が聴けた <input type="checkbox"/> よくわからなかった 自由回答欄
デュバルク	旅への願い	歌われている歌詞の内容を知らずに聴いた1回目には、音楽からどのようなイメージができたか	<input type="checkbox"/> 曲調からイメージできた <input type="checkbox"/> ぼんやりとイメージできた <input type="checkbox"/> よくわからなかった 自由回答欄 どのようなイメージや物語を思い浮かべましたか？
		歌詞の内容や説明を聞き、1回目は違うイメージをもちながら聴くことができたかどうか	<input type="checkbox"/> 歌詞の内容と音楽からイメージできた <input type="checkbox"/> ぼんやりとイメージできた <input type="checkbox"/> よくわからなかった 自由回答欄 どのようなイメージや物語を思い浮かべましたか？
演奏者が間近で演奏するのを聴いて、どのように感じましたか？			
[]			
今日の音楽鑑賞会はいかがでしたか？今後の参考にしたいので、できるだけ具体的に書いてくれるとうれしいです。			
[]			